

# FOR の意味論

—— その歴史的考察 ——\*

加藤 鉦三・花崎 美紀

キーワード：for, 前置詞, 多義

## 【1】機能語の多義性研究の課題

### 1.1 課題と方法論的テーゼ

前置詞 for には、後で見るように非常に多くの意味があるとされている。例えば、for に対して木下 (1995) では12, Lindstromberg (1998 [1997]) では16, *Cobuild* では37の意味が設定されている。本稿でも後で16の意味を設定する。その中に、次の用法のように、for の他の用法に関係付けることが難しいものがある。

- (1) a. [方向] John left for Tokyo today.  
 b. [スパン] John has been in Tokyo for three months.  
       Go straight for a mile.
- (2) a. But for your help, I couldn't have done it.  
 b. For all his riches he's not happy. (新英和中辞典)

後で詳しく見ることになるが、(1)は生産的ではあるけれども他の用法とは関連付けられない。このような用法を「孤立用法」と呼ぶことにする。また(2)は(i)特定の単語との組み合わせで現れ、また(ii)常に同じ文中の位置で現れる、という特徴を持った表現であり、このような特徴を持つ用法を「熟語用法」と呼ぶことにする。

前置詞や助詞等の機能語の研究では、このようなものは典型的なケースである。たいていの場合には非常に多くの意味・用法が認められ、その中には「孤立用法」や「熟語用法」が認められる。機能語の多義性の研究の課題は次のものであると本稿では考える。

### (3) 機能語の多義性研究の課題

- a. 観察される全ての意味・用法の分類・記述  
 b. 各用法間の関係付け  
 c. 共通点を軸としたネットワークの構築

\* 本稿は、日本英文学会中部支部第57回大会（愛知大学、2005年10月）における口頭発表「Forの意味論」に基づいたものである。同大会発表時での宇納進一氏、中野弘三氏のコメントにこの場を借りて謝意を表したい。本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（平成16年度基盤研究(c)「英語の「機能語」と呼ばれる語の意味ネットワークと孤立用法に関する意味論的・史的研究」代表者：加藤）の援助を受けてなされたものである。

- d. ネットワークに入らない「孤立用法」の特定
- e. 熟語または準熟語としてしか用いられない「熟語用法」の特定
- f. 「孤立用法」と「熟語用法」の存在の説明
- g. 近隣語との守備範囲の設定

前置詞や助詞等の意味を考える際、その語の一部の用法だけを対象とすることは望ましいことではない。一部の用法だけを考察することに意味がないというわけではなく、洞察的な成果をあげることはもちろん可能であろう。ただ、そのような研究では、まさに一部の意味を研究したのであって、当該語の意味を考察したことにはならない点に注意すべきである。(3b)にあるように、本稿ではある一つの多義語全体の意味をネットワークとして記述することを、原理上達成可能な目標として設定している。そう考える背景はすぐ後で詳述する。さて、多義性をネットワーク化できるという前提に立つ立場では、ある多義語の意味  $M_i$  は、その語の意味の集合  $M_1 \sim M_n$  の中で関係付けられることによって決定されると考える。<sup>1</sup>つまり、極論すれば、意味  $M_i$  は他の意味から切り離して単独で存在できないと考えていることになる。(3a)の「全ての」は、本稿の立場では絶対に必要な方法論的テーゼである。

## 1.2 意味ネットワークと One-Minimum-Step の原則

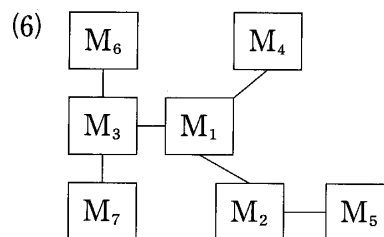
一つの単語の意味はネットワークを成す、という本稿の前提は、次の想定から来るものである。

### (4) One-Minimum-Step の原則

- a. 意味  $M_i$  から  $M_{i+1}$  への写像だけが可能である。(step-by-step)
- b.  $M_i$  とその派生形  $M_{i+1}$  の違いはミニマムである。(minimum step)

(4)のような想定は、意味変化のあり方として自然なものであるように思われる。さて、(4)の想定のもとでは、多義的な単語の全ての意味が互に関係付けられることを論理的に含意する。今  $M_1$  から  $M_7$  の意味を持つ多義語があるとしよう。そして意味のうち1箇所だけが違う意味どうしで(5)のようにペアを組ませることができるとしよう。このようなペアの組み合わせである場合には、(6)のように連続的なネットワークを構成していることになる。(cf. Lakoff (1987))

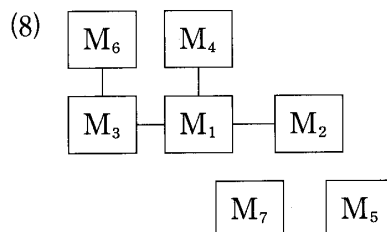
- (5) ( $M_1, M_2$ )
- ( $M_1, M_3$ )
- ( $M_1, M_4$ )
- ( $M_2, M_5$ )
- ( $M_3, M_6$ )
- ( $M_3, M_7$ )



<sup>1</sup> 実際にはそれでは不十分である。ある意味  $M_i$  が確定するのは、(3g)で言う意味上の近隣語との守備範囲の設定という作業を経てからである。例えば、byには時間の用法があるが、その意味を確定するにはby全体の意味を考えるだけでは不可能であり、時間用法の近隣語であるuntil, in, within等とのそれぞれの守備範囲の確定が必要である。

次に同じくある単語がやはり  $M_1$  から  $M_7$  までの意味を持つ場合を考察してみよう。ここでは(5)のように一箇所だけ意味が違うペアを探しても、たとえば  $M_5$  と  $M_7$  はそのようなペアに組み入れることができない（つまり  $M_5$  と  $M_7$  は他のどの意味とも 2 箇所以上の意味の違いがある）としよう。例えばペアは(7)のようになり、それをネットワークの形にすると(8)のようになる。ここでは  $M_5$  と  $M_7$  は他の意味と結ばれておらず、孤立している。前節で述べた「孤立用法」または「熟語用法」である。

- (7) ( $M_1, M_2$ )  
 ( $M_1, M_3$ )  
 ( $M_1, M_4$ )  
 ( $M_3, M_6$ )  
 $M_5$   
 $M_7$



ある単語の意味の分布がこのような状況である場合は、(4)の想定からするとあってはならない分布であるということになる。しかし現実にはこのような意味分布になっている場合が実際に存在する。例えば *by* の *work by day*, *study by night* や、*in* の *finish it in ten minutes* などがそうである。これらはそれぞれ *by*, *in* の他の用法とはかけ離れた意味を持っており、ネットワーク上の位置づけは(8)の  $M_7$  のように他から孤立している。

(8)のような状況の場合、(4)を仮定する立場では、次の研究プログラムが自動的に設定されることになる。なぜなら、(4)は、(i)他の意味と one minimum step で結び付けられない意味は原理上ないはずであり、(ii)よって現在では  $M_5$ ,  $M_7$  を他の用法に結びつけることはできないが、当該言語の歴史のある段階では、 $M_5$ ,  $M_7$  を他の用法に結びつける「失われた意味」が存在していたはずであることを予測するからである。

(9) 孤立した用法説明を起点とした研究プログラム

- a. 真の孤立した用法は原理上存在し得ない。
- b. よって現在孤立している  $M_i$  も、過去のある時点まではそれを他の用法と結びつける意味  $M_j$  があったはずである。
- c. よって孤立している  $M_i$  に近い用法  $M_k$  と  $M_i$  の意味を手がかりに、理論が予測する「失われた用法」 $M_j$  を求めて当該言語の意味の変遷を調べる必要がある。
- d. 孤立した用法は、ある特定の単語の組み合わせや特定の文中での位置でしか使用されない「熟語用法」(cf.(2), (3d, e)) である可能性がある。そのような用法は、「失われた用法」への手がかりとなるかもしれないという点で実は重要なものであるかもしれない。

Hanazaki and Kato (2003, 2004) はそのような研究プログラムに沿ったものとして位置づけられる。ここでは *by* を対象に考察した。By の現在での中核的意味は「経由」であると考えられる。By のほとんどの用法は「経由」を中核とするネットワーク内で位置づけら

れるが, by day, by night という熟語表現は, by の他の用法に結び付けられない。しかし古英語期の状況を調べると, 当時の by の中核的意味は「辺り」であり, それを時間領域に写像したものがこの用法である。空間的「辺り」がその後失われ, よってその時間用法であった by day は他の用法と切り離され, 熟語としてのみ生き残った。以上がこの研究の, 孤立した用法に関する主張の概要である。

この研究では(9)は明確に意識されていたわけではないが, 結果として(9)に沿った結果を出したものと言えるだろう。この by の研究は, 見方を変えれば, 前置詞研究における歴史的考察の必要性を訴えるものとして見ることができる。まず現代語における意味分布を概観する。そこで他の用法に結び付けられない孤立用法や熟語用法が見られる場合, それらの存在は, (4)の One-Minimum-Step の原則に立つ立場では, それらの孤立した用法をかつてはネットワーク全体に結び付けていた「失われた用法」の存在を暗示するものとして受け取られることになる。そこで当該語の過去の用法を調査していくことになる。このように, 孤立した用法も含めて意味ネットワーク全体を考察するには, 歴史的アプローチを取ることが不可欠である。

歴史的考察を重視するこのアプローチは, 次のような強い主張をしていることにもなる。これは(9d)を別の言い方で述べたものでもある。

#### (10) One-Minimum-Step の立場からの主張

熟語用法を熟語として片付けてしまってはならない。熟語用法こそが当該語の過去の用法復元の手がかりとなるものである。

### 1.3 意味の同定

ある単語の意味を考える際, 個々の意味を他のものと区別して一つの用法であると確定するという作業は, 多義研究では決定的に重要なものである。その作業のガイドラインとして, 本稿は Tyler and Evans (2003) の提案を採用する。(11)に続く例文と意味の認定は Tyler and Evans のものである。筆者らは(12)から(14)の分析をそのまま首肯するものではない<sup>2</sup>が, ここでは例示のために原著者の例をそのまま引用する。

#### (11) 意味同定のガイドライン

[1] abstract away the spatial relation of Trajector (henceforth TR) and Landmark (henceforth LM) of one sense A

[2] combine that resulting schema with the other information, both linguistic and extra-linguistic, in sentence that contains B. If the meaning of the sentence can

<sup>2</sup> 例えば(14)の over は(12)のものと意味が違っていると Tyler and Evans は主張しているが, それには疑問の余地がある。Over の基本的意味を「超えている」と考えれば, (12)(13)は「垂直方向に超えている」のであり, 一方(14)では「水平方向に越えている」と考えることができる。(12)から(14)で over がそのような意味になるのは, over 自身の責任ではなく, TR・LM・動詞の意味などから決定されていると考えることができれば, (12)から(14)の over 自身は同じ意味であるとする議論をすることも可能である。本稿では, そのような方向を意識しながらも, 次節以降で見る for の意味の同定に関しては(11)の方式に従った。紙幅の都合もあり, ここで示唆した方向は本稿では踏み込まず, 今後の課題としたい。

be inferred, B is not a distinct sense, and if not, a distinct sense.

(Hanazaki 2005 : 415)

- (12) a. The picture is over the mantel.  
 b. *over* : TR being higher than LM
- (13) a. The rabbit hopped over the fence.  
 b. The rabbit hopped <TR being higher than LM> the fence
- (14) a. Arlington is over the Potomac River from Georgetown.  
 b. Arlington is <TR being higher than LM> the Potomac River from Georgetown (ibid. : 419)

(12a)の over は(12b)のような意味を持つ。(13a)の over には、(13b)のように(12b)で認定した意味を代入しても意味は変わらない。そのため、(12)と(13)の over は同じ意味であると認定される。一方、(14a)の over に(12b)の意味を代入することはできない。そのため、(14)の over は(12)のものとは別の用法であると認定される。

次節では for の諸用法を見ていくことになるが、そこで認定されている意味は(1)のガイドラインに従って同定したものである。

## 【2】For の意味ネットワーク

### 2.1 For の意味

この研究のために、British National Corpus の for を含む500例を分析した。それを前節(1)の方式で分類した結果が(15)である。

#### (15) For の意味

- |          |                       |  |
|----------|-----------------------|--|
| a. 方向    | <in the direction of> | leave London for India   |
| b. 目的    | <for the purpose of>  | He arrive for dinner   |
| c. 追求    | <in pursuit of>       | look for a job   |
| d. 交換    | <in exchange with>    | I paid ¥500 for this book  |
| e. 代用・代表 | <in place of>         | used the ashtray for a paperweight<br>Mary spoke for her class<br>send a check for \$500 |
| f. 理由    | <because of>          | he shouted for joy   |
| g. 利益    | <for the benefit of>  | sing for each other  |
| h. 賛成    | <in support of>       | I am for it  |
| i. 1対1   | <by, at>              | three for one<br>word for word<br>appointment for this afternoon                         |
| j. ~として  | <as>                  | mistake someone for somebody,<br>blame the print for old                                 |
| k. ~の間   | <throughout>          | ~ is so for months   |

- |                      |                    |  |
|----------------------|--------------------|--|
| l. 記念して              | <in celebrating>   | name a child for the king,<br>for the health |
| m. ～にしては             | <considering>      | the weather is severe for this season        |
| n. ～に対して             | <as "object">      | responsible for                              |
| o. 逆接                | <for all>          | for all I know                               |
| p. 否定条件 <sup>3</sup> | <if there is no ～> | but for your help                            |

以下、解説が必要なものに対して少し説明しておく。

Appointment for this afternoon が(15i) [1対1] として分類されているのは、この用法は時間的なものではあるが、例えば appointment for two o'clock と言えるように、(15k) [～の間] と違ってこの用法には時間幅という概念が見られないからである。アポの時間を指定する言い方であり、アポの時間と指定された時間が一対一対応しているという考え方を本稿では取った。

(15m) [～にしては] は、(15j) [～として] の亜種である。[～として] は同定 (equation) である。例えば mistake someone for somebody では、someone=somebody と認識したということを言っている。(15m) の the weather is severe for this season では、severe であると叙述することによって、the weather=this season の同定が成り立たないことを主張している。このように、(15m) は(15j) の否定形であると言える<sup>4</sup>。

(15n) [～に対しては] は、形容詞等の目的語を表示する用法である。後述するが、この用法は中英語期に失われた与格の代用であろうと考えられる。そのため、意味論的には「なぜ for が与格を代用できたのか」を考察することになる。しかし現代英語においては、この用法を意味論的に考察するよりは、「与格代用としての格マーカー」という統語論的なアプローチの方が有効であろうと考えられる。

(15o, p) は、それぞれ all との組み合わせ、but との組み合わせのみで現れ、しかも両者とも文頭でしか用いられない。そのため、1節で議論した「熟語用法」の典型的なものである。よって、(10)「One-Minimum-Step の立場からの主張」からすれば、for の多義研究で重要な位置を占めることになる。

## 2.2 For の原義と古英語期の状況

1節で、意味拡張は one-minimum-step で一箇所ずつの変異という形で行われるという前提を立てた。本節では for の意味分布について、その one-minimum-step の形で提示しなければならないところではあるが、本稿の目的は、for の現代語での分布の詳細な記述ではなく、事実としてそのような分布になった経緯の説明を主眼としている。そのため、本稿では for の意味を大まかに分類するに留め、現代語の分布の詳細は稿を改めて論じることとしたい。

<sup>3</sup> (15p) は収集した500例のうちにはないものであるが、重要な用法であるため追加した。なおこの用法に筆者らが注意を向けたのは、日本英文学会中部支部大会(2005年10月)での宇納進一氏の指摘による。

<sup>4</sup> 本稿注2で示唆した考え方では、(15m) を(15j) から独立させる必要はないことになる。今後の課題としたい。

(15)の for の諸用法は(16)のように分類される。囲み文字になっている意味は、古英語期からある用法である。それ以外は、中英語期かそれ以降に出現した意味である。なお、出現時期に関する情報は全て OED に拠っている。

(16) For の意味の分類

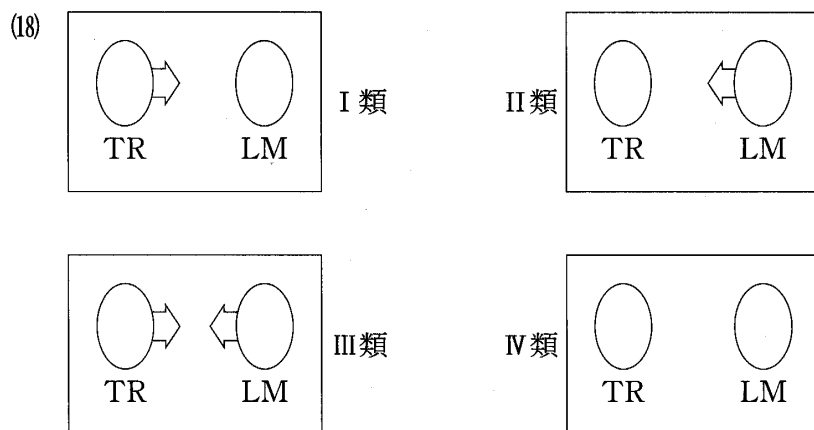
- I 類 [TR から LM への方向性が感じられる]
  - a. 方向 <in the direction of> leave London for India
  - c. 追求 <in pursuit of> look for a job
  - g. 利益 <for the benefit of> sing for each other
  - h. 賛成 <in support of> I am for it
  - l. 記念して <in celebrating> name a child for the king,  
for the health
  - n. ~に対して <as "object"> responsible for
- II 類 [LM から TR への方向性が感じられる]
  - b. 目的 <for the purpose of> He arrived for dinner<sup>5</sup>
  - e. 代用・代表 <in place of> used the ashtray for a paperweight  
Mary spoke for her class  
send a check for \$500
  - f. 理由 <because of> he shouted for joy
- III 類 [TR と LM の間に双方向性が感じられる]
  - d. 交換 <in exchange with> I paid ¥500 for this book
  - i. 1対1 <by, at> three for one  
word for word  
appointment for this afternoon  
mistake someone for somebody,  
blame the print for old
  - j. ~として <as> the eather is severe for this season
  - m. ~にしては <considering>
- IV 類 [TR と LM の間に方向性が感じられない]
  - o. 逆接 <for all> for all I know
  - p. 否定条件 <if there is no ~> but for your help
- その他
  - k. ~の間 <throughout> ~ is so for months

(16)を見ていて気づくのは次の2点である。

<sup>5</sup> 木下 (1995) に従い, [目的] を [LM から TR への方向性が感じられる] とした。木下は, 目的と理由は密接に結びついており, 目的を, 行動を起こす誘引としている。本稿の言葉で言えば, [目的] は TR → LM ではなく, LM → TR であるということになる。

- (17)a. I類からIV類まで、すでに古英語期からあった。  
 b. IV類のみが熟語用法である。

For は現代英語において驚くべき多義性を持っているが、(17a)の観察は、その多義性が多かれ少なかれすでに古英語期からあったことを示している。I類からIV類のイメージスキーマを次に示す。



(18)は現代英語での大まかな状況であると同時に、古英語期での状況でもある。ここでの課題は次の2点である。

- (19) a. I類からIV類までをどうすれば関係づけることができるのか？  
 b. IV類が古英語期に勢力が弱く、現代英語では更に衰微して熟語用法になっていることをどうすれば説明できるのか？

(18)のような状況では、I類からIV類までのいずれかを中核として全てを直接に結びつけることはできない。なぜなら、どれを中核と設定しても、どれか一つは2ステップの違いがあるからである。また、I類とII類、III類とIV類は、それぞれ2ステップの違いとなっているが、それだけでなく、方向性に関してそれぞれ全く逆のイメージスキーマとなっていることに注目したい。更にIV類の弱さを説明しなければならない。

木下(1995)は、forの全ての用法を、本稿でのI類からIV類のいずれかを中核的意味もしくは出発点と想定するのではなく、I類からIV類のいずれでもないforの古英語期の意味[前]から導こうとしている点で注目に値する。

## II FORの意味構造

英語のFORは、印欧語根\*-perから出ていて、ドイツ語 vor/für, オランダ語 voor, デンマーク/ノルウェー語 for, スウェーデン語 för, イタリア語 per, スペイン語 por, フランス語 pour などと同根である。\*per-の原義は「前に」であるが、上に挙げた諸言語の同根語では多くの分義を派生させている。

英語の前置詞FORは、FOREおよびFORE-と同根であるが、早い時期に意味・機能の点で分化した。すなわちFORE(-)は副詞・形容詞・名詞・接頭辞として「前に」の

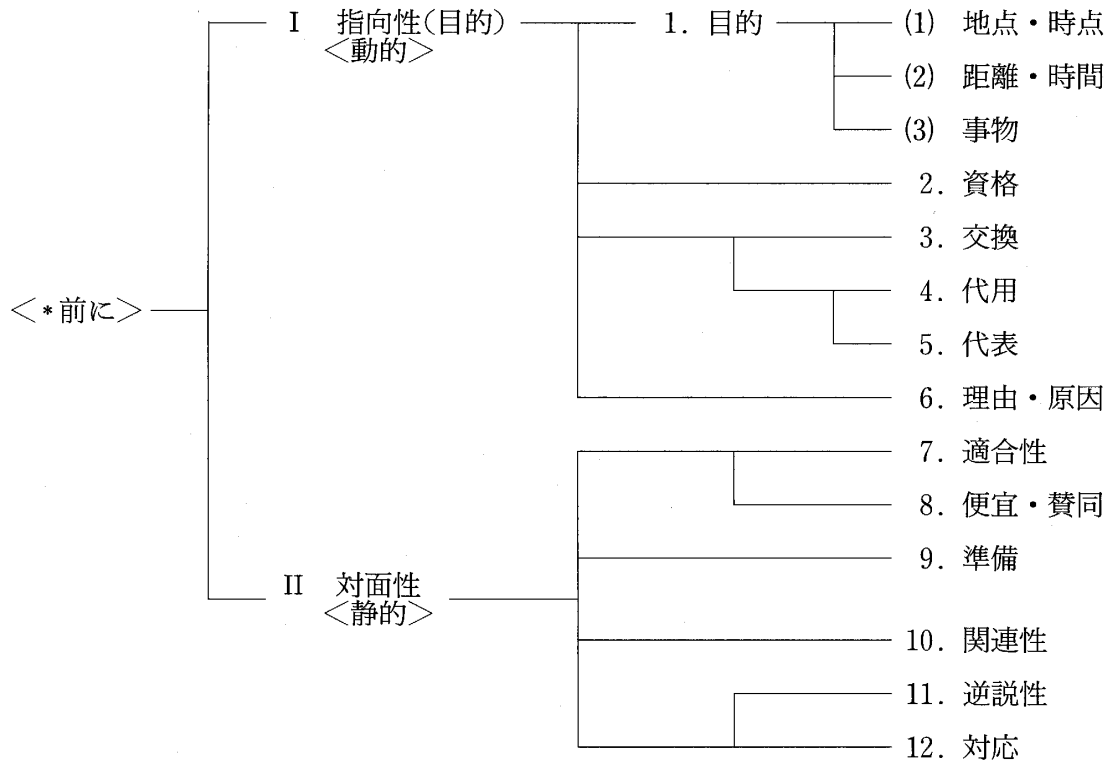


意味を表し、FOR は比喩的な意味を表すことになった。なお「前に」を意味する前置詞としては BEFORE が用いられるようになった。ただし「(空間的に) 前に」の意では IN FRONT OF のほうが一般的である。BEFORE はゲルマン祖語 \*bi-['by'] + \*foran['from the front'] から出ている。また接続詞 for は、for þæm þe['for that which'] の省略形である。

英語の FOR では<(空間的に/時間的に) 前>の意は廃れているが、それを設定することによって、FOR のさまざまな分義を体系的に説明することができる。すなわち「(空間的に) xの前に」という原義から、比喩的に「xに向かって/を指して」という動的な意味と、「xに向いて、xに面して」の意が出る。便宜上、前者を<指向性>、後者を<対面性>と呼ぶ。  
(木下 (1995, 142))

木下による for の意味分類は次のものである。

(20) FOR の意味体系 (木下 (1995, 149))



各項目の詳細は置くとしても、木下の分析には次の問題があるように思われる。

(21) 木下分析の問題点

<前に>が<動的>と<静的>に分岐しているが、

- a. <動的>と<静的>に分岐したとする理由が明らかでない
- b. <動的><静的>の分岐以外の可能性を考察していない
- c. 「指向性」=「目的」=「動的」という図式になっているが、この3つの概念は分けて考えるべきではないのか?
  - c1. <動的>の中で本当に動的であるのは(1)「地点/時点」と(3)「事物だけではな

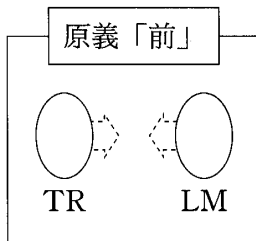
いのか？

- c2. 古英語期には真に〈動的〉である用法はないが、その理由を考察していない
- c3. 〈動的〉の中で6「理由／原因」は「原因が拡大されて理由（誘因）となり（p.146）」としていることから、6は他のものと方向が違うと考えていることになるが、その違いが分類に反映されていない

本稿では、for の原義を [前] とする点は木下に従いつつも、(21)の理由により代案を提出する。その提案は、当然ながら(18)(19)の解決を狙ったものである。その提案は(22)である。

(22) For の原義に関する提案

- a. 古英語期の for の [前] のイメージスキーマは次のものと考えらるべきである。



- b. このスキーマから(18)の I 類からIV類はいずれもワンステップで導き出された。

「LMの前はTR」は「TRの前はLM」でもある。(22a)のスキーマはその対称性を点線の矢印で表したものである。

古英語期には、for と並んで、[前] の意味だけを持つ beforan がすでに用いられていた。Beforan は概略 be (=by) を for に付けたものである。すでに見たように、Hanazaki and Kato (2003, 2004) では、古英語期の by の中心義を空間的意味である [辺り] であると論じている。本来空間的意味を持つはずの for に、空間的意味を持つ by を付けて更に空間的意味を補強しなければならなかったということは、古英語期に for はすでに空間的意味が相当弱くなっていたと解釈すべきである。このことは、(17a)、すなわち古英語期にすでに for は非常に多義的であったことと符合する。For の原義が [前] であることは、木下からの引用中にある語源的考察ならびに「前置詞の本来的用法は空間用法である」という一般的理解から間違いないものと思われる。その [前] は古英語期においてすでに勢力が弱く、空間的意味あい希薄な I 類からIV類が競合していたという状況にあったのであろう。問題は、その [前] から、I 類からIV類をどうやって導き出すかである。すなわち(19a)の問題設定である。本稿の主張は、[前] という概念の対称性を(22a)のように解釈することによって I 類からIV類という4つのバリエーションをワンステップで導き出そうというものである。その主張は、具体的には(23)である。

(23) (22a)から(18)への派生

[前] : TR は LM の前 = LM は TR の前

そこでは「向き」の意識は4通り

- a. TR が LM に向いていることを焦点化 → I 類
- b. LM が TR に向いていることを焦点化 → II 類
- c. TR と LM が向き合っていることを焦点化 → III 類
- d. 「向き」の焦点化なし → IV 類

(21)で述べたように、木下の考察では、方向性の向きに関して十分な考察がなされていない。おそらくその理由により、論理的に可能な4通りを考察していない。本稿の主張である(23)では、その4通りすなわちI類からIV類の全ての可能性を考察している点に注目されたい。

古英語期の状況に関しては、(21c2)で指摘した点、すなわち、古英語期においては、方向性は動きを含意しない「向き」だけであり、動きを含意する用法は中英語期以降に出現した、という事実が重要であると本稿では考える。動きを含意する用法は、次に(16')として再掲するI類の[方向][追求][利益]だけである。

(16') I 類 [TR から LM への方向性が感じられる]

- |    |       |                       |  |
|----|-------|-----------------------|--|
| a. | 方向    | <in the direction of> | leave London for India                       |
| c. | 追求    | <in pursuit of>       | look for a job                               |
| g. | 利益    | <for the benefit of>  | sing for each other                          |
| h. | 賛成    | <in support of>       | I am for it                                  |
| l. | 記念して  | <in celebrating>      | name a child for the king,<br>for the health |
| n. | ～に対して | <as "object">         | responsible for                              |

その3つのうち、[利益]のみは古英語期から観察されている。しかし動きを含意する[利益]の用法は、与格交替構文 I bought it for Mary のような場合であり、この用法は中英語期以降に現れたものである。よって、動きを含意する for は、いずれも中英語期以降に出現したことになる。次節では、この事実を起点として for の中英語期以降に可能になった用法をいくつか考察する。

### 2.3 [方向]

よく知られているように、中英語期に名詞の与格語尾が消失した。それを補うため、二つの前置詞が与格の代用として用いられた。一つは to であり、もう一つは for である。ここで、なぜ与格語尾の代用として for が用いられたのかを考えたい。(24)のような与格交替構文で、to が用いられる場合と for が用いられる場合とでは、意味に大きな違いがあることが知られている (Takami (2003) やそこでの参照文献を参照)。

- (24)
- a. John gave Mary some money.
  - b. John gave some money to Mary.
  - c. John bought Mary a doll.
  - d. John bought a doll for Mary.

To の場合には、直接目的語が to の目的語に到達することが含意される。一方、for の場合には、直接目的語が for の目的語に到達することまでは含意されないが、目的語に到達させるという意図の下に行為がなされることは含意される。更に、その行為は for 句の利益になるようにという意図がある。この構文で、与格の代わりに for が用いられるようになったのは、for がそれ以前から [利益] の意味を持っていたからであると考えられるだろう。

さて、本節の目的にとって重要な点は、与格交替構文で、今確認した [利益] の意味を足がかりとして for が用いられるようになった、という点である。与格交替構文では、すぐ上で見たように、直接目的語の移動という概念が明瞭である。例えば、与格交替構文以前に古英語期で見られた do something for you のような文では、for 句の利益という点は明瞭だが、具体物の移動を含意するというわけではない。しかし for を用いる与格移動構文では、to によるもののように到達までは含意しないものの、直接目的語の移動自体は含意されている。ここから、for の意味に関して、次のように主張したい。

(25) For の方向性の質的変換

- a. 古英語期までの for の方向性は「向き」だけであった。
- b. 中英語期に導入された与格交替構文で用いられることにより、for の方向性は移動の概念を持つに至った。

ここで、移動の概念を最も明瞭に示す [方向] start for Tokyo の用法を考えよう。OED によれば、この用法の初例は次のものである。

(26) Indicating destination. cf. Fr. *pour*.

c1489 Caxton *Sonnes of Aymon* i. 36 She asked whi they were departed for the kyniges courte. (OED, for 12.)

ここで興味深いのは、OED がこの用法について「フランス語の *pour* を参照」としている点である。Pour の基本的な意味は「ために」であり、他に(26)のような目的地を示す用法と、後で重要になる「～の間」という用法もある。さて、中英語期は、フランス語の影響を大きく受けた時期である。また、pour 自体が、先の木下からの引用にあるように、for と同語源である。そこで、本稿では、pour と for の関係について、次のように考えたい。

(27) Pour と for の関係

- a. Pour と for は「ために」という意味を持つ点で共通している
- b. Pour は目的地の明示という用法があったが、for には「向き」しかなかった
- c. 与格交替構文で for が用いられるようになったことにより、for の「向き」に動きの概念が導入された
- d. それで、pour の目的地の用法を for が獲得するのを可能にした

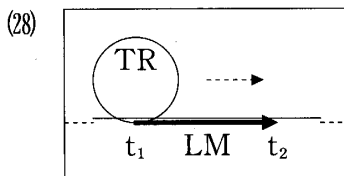
Pour と for は基本的意味「ために」において共通していた。よって、pour=for という図式が成立し、pour にはあるが for にはない、という用法を、for が pour から取り入れることができる素地はあった。しかし for には動きの概念がなかったため、pour の持つ目的地という用法を取り入れることはできなかった。しかし与格交替構文で for に動きの概念が導入されたため、それが可能になった。(27)の主張はそういう内容である。(26)で見たように、OED では for の目的地の用法について、pour の影響を示唆するだけに留まっている。それに対し、本稿では目的地の用法を for が取り入れるための準備を与格交替構文が果たした、という説明を与えたつもりである。

#### 2.4 [～の間]: 孤立用法

(15k) [～の間] は、(16)ではIV類 [TR と LM の間に方向性が感じられない] に分類せず、その他とした。それはこの用法に方向性が感じられないのは確かだが、それだけでなく、TR と LM が並んでいるという意味にもなっていないからである。(18)IV類のイメージスキーマを参照されたい。

(15k)以外の用法は、(18)のI類からIV類のように、TR と LM が並んでいるというイメージスキーマによって記述できる。それができないのは(15k) [～の間] だけである。その意味で、この用法は他から孤立している。その一方で、この用法は次に見る熟語用法と違って、常にある単語とともに現れるとか、常に節中で一定の位置に現れる、ということはない。つまりこの用法は、孤立はしているが生産的である。その用法を、1節で「孤立用法」と定義した。では、孤立はしているが生産的である、という用法はどのようにして可能なのであろうか。

(15k) [～の間] のイメージスキーマは、(28)のような時間軸上の線分上の移動であろう。



時間の幅を言う表現である [～の間] にあたる前置詞は during と for の二つである。このうち、during は目的語に vacation や my stay といった時間の幅そのものである名詞を取る。一方、for は three days や ten years といった時間の単位とその数量を目的語として取る。このことは、during が時間を一つの箱として指定するのに対し、for は数量の積み重ね、すなわち経過の幅、として時間を指定していると考えることができる。(28)は、for の意味的特徴として、経過つまり時間軸上の移動を表したものである。(28)は、(18)のI類からIV類のイメージスキーマとはかけ離れたものとなっている。このように他と非常に違う意味のものが for の用法にあるということはいかにして可能になったのかを本節では考察する。

OEDによると、for のこの意味での初例は次のものである。

(29) c1450 *Cov. Myst.* 129 Who seyth oure ladyes sawtere dayly for a 3er thus.

ここで注目されるのは、前節で議論した「方向」の初例(26)より半世紀も早いことである。よって、「～の間」にある方向性に着目した(30)のような議論を展開することはできない<sup>6</sup>。

(30) 「～の間」導入の説明としては取り得ない議論

- a. Pour と for は「ために」という意味を持つ点で共通している
- b. Pour には「～の間」の意味がある。
- c. 「向き」しかなかった for に「方向」が導入されたため、「ために」の共通性を基盤とする pour=for の図式が強化され、「方向性」においても共通点を持つに至った。
- d. For への「方向性」の導入により、「方向性」を持つ pour の「～の間」を for が取り入れることが可能になった。

(30)のシナリオでは、「方向」の for への導入が、「～の間」の導入の準備となっている。もしそれが正しいとしたら、「方向」の初例は「～の間」の初例に先行しているはずである。ところが(26)と(29)に見られるように、それは事実ではない。よって、(28)のイメージスキーマに見られる「方向性」を「～の間」導入の直接要因とすることはできない。

そこで今度は、(28)に見られるもう一つの特徴である「TRの動き」を要因としたシナリオを考察してみよう。

(31) 「～の間」導入の説明

- a. Pour と for は「ために」という意味を持つ点で共通している
- b. Pour には「TRの動き」という特徴を持つ「～の間」という用法があったが、for には「向き」しかなかった
- c. 与格交替構文で for が用いられるようになったことにより、for の「向き」に「TRの動き」の概念が導入された
- d. 「向き」しかなかった for に「TRの動き」が導入されたため、「について」の共通性を基盤とする pour=for の図式が強化され、「TRの動き」においても共通点を持つに至った。
- e. For への「TRの動き」の導入により、「TRの動き」を持つ pour の「～の間」を for が取り入れることが可能になった。

このシナリオを本稿の「～の間」導入に関する説明として提案したい。ここでは、「方向」の時と同様に与格交替構文で for を用いることになったことが最大の要因であるとしている。さて、「方向」に関しては、OED がフランス語 pour の影響を示唆している。一方、この「～の間」に関してはそのような示唆はない。しかし(i) pour が「方向」だけでなく「～の間」の意味を持っていたこと、および(ii) pour と for は同根語であり共通点が多いこと、更に(iii) 「～の間」を当時の for のいずれかの意味から派生させることは不可能であること、の3点を考えれば、「～の間」という意味を pour から借用したと考えることはそれほど無理

<sup>6</sup> (30)のシナリオは、実は筆者らが日本英文学会中部支部大会(2005年10月)において発表した内容である。

がある考えではないものと思われる。

もし「TRの動きを伴う時間の経過」という意味を持つ前置詞が当時の英語にあったとしたら、[～の間]導入はその単語の存在によって阻止されていたものと考えられることはそう的外れではないだろう。そのような前置詞の候補として考えることができるのは through くらいであろう。そこで OED で当時の through の時間用法を見てみよう。

4. a. During the whole of (a period of time, or an action, etc., with reference to the time it occupies from beginning to end). See also GET *v.* 48c.

*a1000 Ags. Ps. (Th.) lxxiii[i]. 21 [22] þurh ealne dæ3 [tota die]. a1250 Owl & Night. 447 (Cott.) And ich so do þur3 ni3t and dai. 1487-8 Rec. St. Mary at Hill 141 On euey sonday throw3e þe yer.*

現代英語において、through は three days 等の「時間単位の積み重ね」を目的語に取ることはない。これは当時においてもそうであったようである。また、OED の定義に during が用いられていることも示唆的である。つまり、through は during と同じように、時間を箱として取るということであろう。このように、for が持つに至った時間用法と、through が当時持っていた時間用法は違う概念のものであったため、pour の「～の間」を for に導入することを阻止する前置詞はなかったものと思われる。なお、時間を表す前置詞は through 以外にも多くあるが、それらはいずれも(28)とはかなり違う意味内容を持つものであるため、ここでは考察する必要はない。

最後に、[～の間]が孤立用法であることについて考察しておきたい。1.1節において、研究プログラム(9)を提案した。ここでは関係部分のみ再掲する。

(9) 孤立した用法説明を起点とした研究プログラム

- a. 真の孤立した用法は原理上存在し得ない。
- b. よって現在孤立している  $M_i$  も、過去のある時点まではそれを他の用法と結びつける意味  $M_j$  があったはずである。
- c. よって孤立している  $M_i$  に近い用法  $M_k$  と  $M_i$  の意味を手がかりに、理論が予測する「失われた用法」 $M_j$  を求めて当該言語の意味の変遷を調べる必要がある。

本節での [～の間] 導入に関する提案は、(9)にとってかなり強い主張をしている。本節での提案は、(9b)での  $M_j$  が密接なつながりのある外国語の単語であると主張していることになる。これは荒唐無稽な提案に思われるかもしれないが、言語接触が日常的に行われている地域においては、あるいは異常な事態ではないかもしれない。実際中英語期の英語とフランス語はそのような関係にあったと考えられる。(9b)の  $M_j$  を外国語に求めてよいものかどうかは、言語接触の状況を調査することによって結論を出すことができるであろう。

## 2.5 熟語用法

最後に熟語用法を考察する。研究プログラム(9)では熟語用法について次のように述べた。関係部分のみ再掲する。

## (9) 孤立した用法説明を起点とした研究プログラム

- d. 孤立した用法は、ある特定の単語の組み合わせや特定の文中での位置でしか使用されない「熟語用法」(cf.(2), (3d, e))である可能性がある。そのような用法は、「失われた用法」への手がかりとなるかもしれないという点で実は重要なものであるかもしれない。

For でこれに当てはまるのは(16)のIV類であり、そのイメージスキーマは(18)にあるものである。

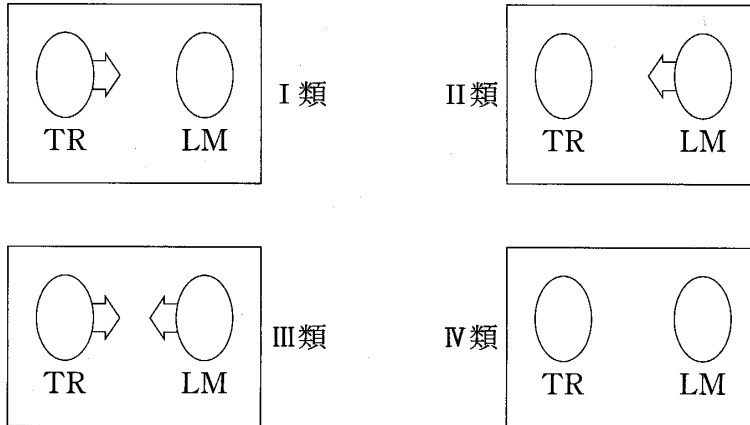
## (16) For の意味の分類

- ・IV類 [TRとLMの間に方向性が感じられない]

o. 逆接 <for all> for all I know

p. 否定条件 <if there is no~> but for our help

(18)



本稿では熟語用法 for all, but for を(18)のように意味ネットワーク上に位置づけた。ここではその意義を考えたい。木下(1995)では、イメージスキーマを使った考察はしていないが、木下から引用した部分から判断すると、本稿(18)のI類とIII類を考えていると解釈できるであろう。

## II FOR の意味構造

(中略)

英語の FOR では<(空間的に/時間的に)前>の意は廃れているが、それを設定することによって、FOR のさまざまな分義を体系的に説明することができる。すなわち「(空間的に) xの前に」という原義から、比喩的に「xに向かって/を指して」という動的な意味と、「xに向いて、xに面して」の意が出る。便宜上、前者を<指向性>、後者を<対面性>と呼ぶ。(木下(1995, 142))

ここで重要なのは、木下自身は for の [理由] と [目的] に関して TR ではなく LM 側に「向き」を設定するような考え方(すなわちII類)を示しながらも、それをI類とははっきり分けて考えるようなことはしていないという点である。

本稿では、IV類、すなわち TR 側にも LM 側にも「向き」を設定しないというイメージ



スキーマを熟語用法のために設定した。木下のようにもしそれをしていなかったとしたら、本稿の考察はI類かIII類のいずれかを中心義として設定し、残りをそこから派生させるような考察をしていたかもしれない。しかし実際にはIV類を設定した。それにより、I類・III類・IV類という3つの意味を考えることになった。ここで重要なのは、その3つは自然な組み合わせではない、という点である。これらを自然な組み合わせとするためには、つまり3つの用法から見てあり得る可能性の全てを考察対象とするには、どうしてもII類を設定する必要が生じてきた。そのII類に合う意味を考えると、木下がI類と分けることをしなかった[理由]と[目的]がぴったり当てはまることに気づいた。本稿の(18)の設定はそのようになされたのである。更に、上で述べてきたように、(18)の4つの意味をワンステップで導くような原義を求める、という方向で考察が進んだ。本稿の考察の過程はそのようなものであった。つまり、本稿の主張は、熟語であると軽く片付けられがちな for all, but for に対してまともに向き合うことによって方向付けられたと言ってもよい。

次に、IV類がなぜ生産的なものではなく、熟語用法としてしか生き残っていない理由を考察する。(18)のIV類のイメージスキーマは、実は現代英語における with と同じである。With の意味は概略「TR と LM が場において共にある」というものであろう。そのイメージスキーマは(18)のIV類と全く同じになるはずである。さてここで重要なのは、IV類は古英語期からある用法ではあるが、本稿の主張からすればそれは原義[前]から派生されたものであるという点である。派生されたものであるならば、その派生先に with がすでにあったとしたら、そもそもその派生自体が許されないはずである。実際には with の「いっしょに」の意味は古英語期にはなく (cf. OED *with* 22a), よって with 自体は問題にはならない。しかし古英語期には「いっしょに」の意味を中核的なものとして持つ mid があった。

ここで、本稿でそもそも for all, but for の for に対して何故IV類のイメージスキーマを設定するのかを説明しておかなければならないであろう。For all は「～があるという状況にも関わらず」という意味である。But for は「～がなければ」という意味である。いずれも付帯状況を表しており、それが本稿でIV類のイメージスキーマを設定する理由の全てである。さて、ここで重要なのが、for all, but for のいずれも、ただの付帯状況ではなく譲歩的・否定的な付帯状況の意味を持つという点である。これは現代英語だけの状況ではなく、古英語時代からそうであった。次はこれらの意味に対する OED の定義であり、そこでは否定的な意味であることをはっきり示されている。

(32)23. Of a preventive cause or obstacle.

a. In spite of, notwithstanding. Rare exc. in **for all, any**, with a n. ; also absol. **for all that**, etc.

(中略)

b. Indicating the presence or operation of an obstacle or hindrance. (Cf. ON. *fyrrer*, Ger. *für*, *vor*.) In negative sentences ; also after *if it were not, were it not* ; occas.=for fear of. **f for to die for it**=if I die for it. **but for** : see but C. 29.

さて、これらを原義[前]から派生させるにあたって潜在的な阻止要因となり得る mid で

あるが、現代英語の with と同様に付帯状況の用法もあった。しかし An Anglo-Saxon Dictionary (*mid*, VII) を見る限り、without が持つような否定性は見られなかったようである。これは with は without という否定形を持つが、一方 *mid* にはそのような否定形がなかったことを考えれば当然のことであろう<sup>7</sup>。このように、同じく付帯状況の用法を持ちながらも、*mid* と IV 類は辛うじて役割分担をしていることになり、よって *mid* は辛うじて IV 類派生の阻止要因とはならなかったと考えられる。しかし *mid*、後に with の基本的なイメージスキーマは IV 類と同じものである。このことが、IV 類が生産性を持つことを阻害したものと考えられる。IV 類はイメージスキーマのレベルで競合する前置詞があったため、熟語として生き残ることができなかった、というのが本稿の IV 類に関する結論である。

### 【3】結論

以上の主張をまとめる。

#### (3) 本稿の主張

- a. For の原義は [前] である。[前] という概念の対称性から、「向き」に関して 4 種類の可能性があった。
- b. その 4 種類はいずれも実現された。(cf.(18))
- c. [方向] は、与格交替構文で for を用いることにより導入された「TR の動き」の持つ「方向性」の導入により、フランス語 *pour* から借用されたものである。
- d. 孤立用法 [～の間] は、与格交替構文で for を用いることにより導入された「TR の動き」により、フランス語 *pour* から借用されたものである。
- e. 熟語用法 for all, but for は同じイメージスキーマを持つ *mid* (後に with) により阻止されたため生産性を獲得できなかったため、熟語として生き残れなかった。

[方向] と [～の間] について、本稿は *pour* が持っていた意味を借用したものであると主張した。単語レベルの借用についてはよく知られているものであるが、一つの単語の特定の意味を借用したという主張については、今後その持つ意義を考えていかなければならないであろう。その主張はもしかしたら乱暴なものであるように見えるかもしれない。しかし同じ方向を表すものであるにも関わらず、[求めて] の場合には a quest for a dragon のように

<sup>7</sup> For all を本文中で「譲歩的」付帯状況を示すと述べた。現代英語において、with が同じように譲歩的付帯状況を表し得ることを考えると、本稿の主張は危ういものに見えるかもしれない。しかし、For all の持つ「譲歩」の意味は、(2) の OED の定義が示すようにこの熟語自体が持っている意味であり、その証拠に for all が肯定的付帯状況を示すことはない。一方、with においては肯定的付帯状況を当然ながら表すことができる。この点から、with の譲歩と for all の譲歩は質的に違うものであるということが言える。具体的には、for all の譲歩と違って with の譲歩の意味は、with 自体が持つものではなく、聞き手が語用論的に読み込むものであると考えられる。譲歩を含め、分詞構文の持つさまざまな「意味」は実は分詞構文が持つ意味ではなく、日本語のテ接続やゼロ接続文（「飲みすぎて、翌日気持ち悪かった」／「飲みすぎた。翌日気持ち悪かった」等）と同様に、構文がそのような意味を持つのではなく、会話当事者によって読み込まれるものであるという筆者らの主張については、加藤・花崎 (2003) を参照されたい。その議論は、with の譲歩に対しても有効である。

名詞句内でも動詞句と同様に用いられるのに対して、[方向] の場合には、\*a start for Tokyo のように名詞句内では用いることはできない。これは、\*a stay for three days が示すように、[～の間] についても同様である。このように、他言語から借用されたと本稿が主張する [方向] と [～の間] の for が名詞句に現れることができないという事実は、これらが借用であるため、たとえ生産的ではあっても一人前の用法ではないことと無関係ではないであろう。

### 参照文献

- Hanazaki, Miki (2005) "Toward a Principled Polysemy" *English Linguistics* 22.2, 412-442.
- Hanazaki, Miki and Kozo Kato (2004) "The Semantic Network of *By* (2)" 『人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』第38号, 23-38.
- Hanazaki, Miki and Kozo Kato (2003) "The Semantic Network of *By*" in *Studies in Modern English: the Twentieth Anniversary Publication of Modern English Association of Japan*. Tokyo: Eicho-sha. 337-352.
- 加藤敏三・花崎美紀 (2003) 「As の意味論」2003年11月, 日本英語学会第21回大会, ワークショッププログラム『多義と意味変化』(静岡県立大学)における口頭発表。
- 木下浩利 (1995) 「英語前置詞 FOR の意味構造—仮説の試み—」『筑紫女学園大学紀要』 Vol.7. 139-150.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lindstromberg, Seth (1997, 1998) *English Preposition Explained*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Takami, Ken'ichi (2003) "A semantic constraint on the benefactive double object construction," *English Linguistics* 20.1 197-224.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge U. P.

### コーパス・辞書類

- "An Anglo-Saxon Dictionary" by Joseph Bosworth, edited and enlarged by TN Toller, 1898, Oxford University Press.
- British National Corpus
- Cobuild English Dictionary for Advanced Learners.
- 研究社『新英和中辞典』
- Oxford English Dictionary (OED)